近世説美少年録 三編 二

へ13
3567
12

門へ13
號 3567
巻 12

近世説美少年録第三輯巻之二

東都 曲亭主人編次

第十三回

知母補益しく遠志を將失せ
車前效を論じて當帰を留む

復説末朱之介晴賢は岩ぶも杣木の落葉が舊き縁を結び更て斧柄を
乞妻せれども素より主君の免許を歴て。その意ふ任せしるるれば額髪を剃除
ぜく。一家の主人ふ対るふわ。ぶ晴と人ふ名告く。只是日陰の花增られを暇ふ
身の徒然を慰るとんぐも。ふ落葉ふ伏ふ谷柄さへその心ざゐと正くて浮ゐとは免毛の
頭ふ置く露ぞるも。ふ朱之介が辯佞浮薄の氣質ふれを比れば水と炭の合ざる
ごく。獄舍中ふ処る心地しく。窮屈ふべるもあるぞれど。主家の勢ひ異ふく又ふ
ぞと悔しくも困ふ果く日景短く冬の日を消し難く在りける程ふ安保筑前五郎の三両三回

早稲田大學図書館
昭34.6.3 買
藏書

朱之介を訪慰めく。こゝに人のなきことをあるく。徒無笠竜くこうるべ竟ふ病痾の業りやせん。折
折ハ蔽屋へ来まゝく的でも射ぬ〳〵ふ敵るあるうくけれど在下も私音古つまゝ〳〵ん誘
ぬくとそ立とそふ落葉斧柄ふ倦々とよりて告く病坊る。宿所へ倶とあ〜〳〵べ朱之介ハ
篭の鳥の野ふ放され〜欲びあ。既れく那裡ふ到れば箭五郎が妻の奥なの諫さゝるを
ゆくうけん遽〜く走出く朱之介を奥まるなる。褊室ふ迎入れ寒暖を述恙るを祝〜茶茶
看めるゞたる。管待態の愛敬ゞ兒く。物のいひざる憎ゝ〜ふ斧柄ふ年歳七歩八の姉ふ
あく。縹致も亦二の町るゞ〜髪の結ざる帯の締ざ。ちべく今様ゑれば趣あり。有徒而主人
箭五郎も共侶ふ朱之介を歓待して四面八表の雑談ふ且く時を移る程よ奥なゝ准
備の酒を湯ふ殺も種々ゝて出く。朱之介ふ羞めけ客もあゞも沙量るゝれば是より酒
醼ゞまゝて。献つ酬えろ果〜竟説論ふ奥を催〜る。朱之介ハそ薄醉のヨヌ辯を任と
属目の欝氣を恁々とうち咄て。媒妁の目前ふそやうへばゝうゝ不走向ふ似ゝれども岳

母ハ旦ても苦養ても苦虫を噛潰〜て四角四面の氣韻高く。斧柄も亦島と共ふ起て系ど
繰り機を織ることれゝ外ふ所作ゝ〜。今様ゝ〜唄〜ゝ事ゝ〜ゝ説経弄齋椰節を
学ゞうやと問ハ知ゝぎと廿合ふ況て昨今ハ甲合ふも弄ぶ三弦るゞどハ〜て弾く物ゝ〜ふ足で
撥鳴ら走物るゝや。夢ふゞもゝ〜ゝとゝふ祓ても泣ゆ〜ゞ〜ゞる面色〜く。
返辞を走るのゝ餘情もゝく。寝るゝ〜ふも三指ゆく。許ゝをゆ〜とゝふゝゝ蒲団の端へ如怨
怖ふ枕引ゝ〜く就寝て畢竟太影の偶人と枕を並ゞふ異るゝゞ〜ゞ徒ても夫婦とふ
ゞ〜ゝ。粉糠三合有るゝゞ〜ゝ贅ふるなゝ〜とゝふけ〜昔の人れ格言るゝる察〜ゆ〜ゝ不樂
しふ意中を盡ゝ酒奥の述懐箭五郎呵々とうち笑ひく宣の趣を理るゝれど世ゝ
常言ふ石上ゆも三秋とゝふゝ〜ゝ然ゝそ貴所ハ入壻ゆ〜く又世の入壻とゝふゝ
ゞ〜ゝ今ゆもあれ主用を果〜ゆゞ袖ゝ〜ゝ拂ゝそ武蔵へ還るゆゝ〜ん介ゝゝゞゝも旅ゝ
到底ハ趣のるゝ衝妻を旅宿の賞分月備ふせ〜ゝとゝゝゞゞ不足ゝゝ且く堪忍〜

あへり。とゝ久び奥なもうち笑ひて斧柄さゝの光惚子るゝそゝその該のるゝ伝ゝ焦ゝる
桐も製らねば良琴ゆゝうゝゝ煤け竹も代ゝて愛ゝ元笛ゝるゝとゝの譬諭を女
子の諸礼書ゆゝ元ゝとの伝ゝ元斧柄さゝも徒ゝ乳ゝく教育のゝるゝ遂ゝ佳音を
やゝハゝ暁母ゝ臥房の窓の隙ゝるゝゝゝむゝ共侶ゝゝとゝゝく離れ難ゝ。楽ゝ元中ゝ
るゝのゝんゝゝ教ゝゝ備ゝんゝゝ求めゝゝ疎ゝて然ゝゝゝゝゝ慰れゝ朱之介ゝゝゝゝゝ
鳴ゝゝゝゝ是ゝ寔ゝられゝゝ現格別ゝ才女れ指南向後ゝの誼を用ゝ誤入ゝ処。
上のゝ夫婦ゝゝゝゝゝ齊一咄ゝ笑ひけゝ登時箭五郎ゝ朱之介ゝゝゝゝゝ不平ゝ鷹ゝ桑
奥ゝゝ三絃ゝ弾せ共ゝ謌ゝく酒席の奥を添ゝゝゝ朱之介ゝ泥のごゝゝゝ心蕩け竜
浮れゝ俺屬日の樹腸ゝの一席ゝ洗ひけゝゝゝゝゝ是ゝゝ箭五郎ゝ知己ゝ稱ゝく
隔ゝく交ゝ浅ゝゝゝゝゝゝゝ程ゝ朱之介ゝゝゝゝゝ略町ゝ席ゝゝ堪ゝゝゝ
ゝ箭五郎ゝゝゝ伏ゝ臥ゝゝゝゝ枕ゝゝ奥ゝゝ衣ゝゝゝ被ゝゝ不盤ゝゝゝ納ゝゝの

醒ゝる比呼起ゝ杜木の宿所へかへけり。是ゝゝ又四五首ゝ歴る程ゝ朱之介ゝゝゝゝ
ゝ日ゝれゝ箭五郎夫婦の歓待を受ゝゝゝ酬ひゝゝゝゝゝ然ゝゝゝゝ招ゝゝゝゝ
倒ゝ奥ゝ所ゝ俺復那裡ゝ赴ゝく東道ゝゝゝ。肚裏ゝ尋思ゝゝ件のゝゝゝ窮ゝ
ゝ簡ゝ書寫。金一両可封ゝ篭ゝ是ゝ書笈用の内ゝ納め篤実ゝる人ゝ傭ゝ安保ゝ
宿所へ遣ゝけ。有恁而ゝの次の日の末の比ゝ朱之介ゝ絆ゝ假托ゝ箭五郎許赴ゝけれゝ
待儲ゝるゝゝ夫婦ゝ歓ゝく走ゝ出例の禰室迎入れて骨待又細ゝ當下箭五郎ゝ
ゝゝゝゝゝゝ尽ゝく尊輪ゝ賜ゝく御教諭兼知仕ゝ郷男ゝ聊交遊の歓ゝ表ゝるま
ゝゝ薄酒ゝ薦めまゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝ東道ゝゝゝ一圓金ゝ謙ゝく附屬ゝ
ゝゝゝ厚ゝ情餘りゝゝゝ恥ゝゝゝ既ゝ別頭の友垣ゝ結ゝゝゝゝ中ゝゝゝ此ゝ薪水を
費ゝたりとも酬ゝゝ受ゝゝゝゝ辞ゝゝゝゝゝ筋ゝれゝゝ然ゝゝ還ゝ好意ゝ恃ゝ失敬の憚
りゝゝく准備ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ微笑ゝく謙ゝ知ゝゝゝゝゝ斧柄ゝゝゝ

岳母も性とりわけ酒を嗜むゆえ酒客とりわけ非類として仇のごとくに思はるるゆえ中人招かれざるゆえ
せてい七贅八醋あるといふとも獨酌の白梅と香の物ゆえ苦味苦りて臭わるくあぶれば浸ま
失敬とうろへうろぎ又半日の庖丁を煩はしくして共侶は熟じて盡さずやと長ひて酒肉の料を設せ
まうもの美をえ一生のうとの間に奥ゆかしや盃をもて居る散り又は多日の管待ありも種
々ふるくゆを盡して珍味を擇み用意怠等閑なるべえ。これらうして安ものもあるも盃を受
巡らしてやうやく佳境に入る程に迭ふ口誼むづくく飲ぜんとして喫下と角にして果の精肴なる
勝負を決するゆえ段ゆえ笑ひ咄めるそこの間に又奥ゆかしき絃と撥鳴させて艶曲もそこに昇を
添うて既ゆえに朱之介いえ七八分醉れども精肴ゆえ勝ゆえ頻りに拳を誘ひて
箭五郎惴る面色に絞ふ一杯の酒をれば賭物であり勇
在下必贏べえとゆえ朱之介いはあるべえ一段なりうん何とも賭ゆえ俺ゆえ好ふ
任せて賭物をもまべといへば箭五郎勝ちて鳴らしてあるべうくあるべう在下は是浪人に

貯祿ゆえ錢財ゆえ。なれども一箇身ゆえ換へ奇貨ありそを賭物ゆえ
のとゆえ朱之介いはるべう主の宝花貝は甚だ東西と問れて箭五郎側へ在下ぶ
身ゆえ換へ奇貨は是ゆえ奥ゆえ渠をくれ朝毎ゆえ炊ぎるゆえ目脂難る長夜を
慰るゆえ衣食の両箇ゆえ子種を蒔き田地ゆえ身ゆえ被替ゆえ
第一の美宝在下倘輸ゆえ渠ゆえ側室ゆえ則遊仙窟ゆえ張文成ゆえ
陸ゆえ宿を賭ゆえ
るゆえ敦圉で罵ゆえ朱之介ゆえ目を注ぎ引ゆえ
曉得る朱之介ゆえ迷ひ魂程で奥ゆえ赤些ゆえ擬議ゆえ箭五郎ゆえ對ひて宜ゆえ
ゆえ。俗年十二歳ゆえ比師の坊ゆえ
錢を賜ゆえ怒喜の帝ゆえ碁の賭ゆえ王のゆえ枕ゆえ彼ゆえ
ゆえもゆえ亦何ゆえ惜むゆえ燕の子安貝龍の腮の玉ゆえ奇貨ゆえ

朱之介

笛五郎

る。古書畫古器物の價貴く沽るべき亦錢帛の光りよ捉とあるべや貴人内政戯賭
物ふ出しのべ。これ亦金七兩二分を出べ。便を世話ふ密夫の賄賂此彼良對
ぎやとの五前五郎い異議もなく且感ド且歎ぶ。小ら貴物先生を先ちやまへ平多然と
雌雄を決べ。とふを朱之介い皆果ぎ。懷中の財嚢より數を違へぎ賭物を出と折
敷の上ふ措べよ。やを贏も輸るも迭ふ変易ぎべ。と拉言ふ谷默禱。うち向ひ
声と合と指を扱ひ指を傳ひ且く挑を手ふ程ふ初ふも似ぎ朱之介ふ云ぎ續け輸。
岩ぎも惴立く又更めと財を出と再度の雌雄を争ひ。這回の借券ふも又輸け。
朽ぎやとぎりふ且差くふく巳とぎぎ又更めと賭物を出と争ふ。ふ終ふ贏を
ぎりふ牡鹿の角の束のるふ廿二圓金餘を折れ。今一番を進を奥ふ意ふ推
禁ぎ。酒肴ふ任せ戯れも阿漕ぎ。角文字ふ。その其ふ。ん且く休ぎ
れと慰め推とと又金を落ふ。朱之介い醉と共ふ臭さ醒く悔ぎ。小ら鼻

唄ふ紛せぎ。胸塞り腹ふくだを不快ふ。とり又喫べくもあり。けふ。その時既ふ日ふ
甚を。初更の比ぎ。朱之介ふ宿所の首尾も了得ふ心とぎ。罷らんとく別を
告ふ前五郎ふ何の程ふ醉臥と呼べも答へぎ。登時奥ふ件の金を。とふ。紙ふ
包ぎ。これを朱之介ふ返とふ。終ふの金あるぎとも。盤纏ふ支を缺ふ。
るべれと友垣結ぶ中ふと。宝貨を折くふ。あるとへらせ。とふ。遽を朱
之介ふ。取ぎ頭を掉とふ。然ることあるとや猜券ふ輸ぎとも。鬼とと食の
資ふせんと豫とふ。俺身ふ君侯ふ。路費の賜ふ寡ふ。の金
何ふ女。とふ。の仮ふ措べ。主の睡眠の覺と。宜く言ふ。鷹揚ふ説諭を
言と心ふ表裡ふ。と来甲斐ふ。畫を遷る本意ふ色ふ。
金隠とふ花螺鈿の腰刀やふ引提と。く身ふ奥ふ紙燭ふ。
送る四下小瞞竹緑ふ引兎ふ。長く平晌許背を敲く別れ。ふ。

之介に呂ぶ酒肴を乗じて二十餘金を費ひ、これを奥へと情出のあり初めも那藩より代
主ありて亦笹前五郎を陳ぜしめ折々那首へ赴き猜拳の代の損財をとり復さんと欲
せし笹前五郎諫て後に和君知らざる所あり在下故郷にあり一度猜拳の顔色を見るに
何曾てこれ比反覆打何れ和君の得る技の復會秘頁の恥とも雪人となるべき敵
あるべし咱の三贏て負ずと親切めて諭せども朱之介はその戒に任じ然らざる
反覆打ん事を這回賭物をひたすら考迭に酒を喫て頻りに雌雄を争ふ程に
朱之介は何の技にも贏て稀に輸ことの三度目に及び五百
両の沙金のこゆるを怪ふけるその折々笹前五郎は提軍の欲びをそ酒殺を大々しくのみて朱
之介を呼戸待らその身も飽まで飲吹ける果てに酔臥小夜深て覚ざるの然程に
朱之介は微と技に失却のこ幾回と多く損をされども笹前五郎の酔臥して暁れば忽
随に奥へと姦通せざる日もなく是を損い補うとて盤纏の有を善念せば左
と送る日の今茲も既に元竹のそりあまるに世の人の春の儲のそりあまるに
義を朱之介の三暇あれば一日又笹前五郎許迄るその夜夜中の比及に杜木の宿所へ
来り落葉に既に臥房に入り及斧柄に良人の還るを俟ていまだ寝もせざりければ背門の樞
戸引閉て迎入れ戸を鎖す今宵は特に遅るる物ほうしたさぬと問て躯て爐に沸
起らず素湯を出し茶の曾茶碗汲て来る元錦も美し過ぎて惹れ妻も
恥朱之介は果敢々考ふ心もせで稍酔醒の直渇に茶を汲まると五六碗飲事ん
そぶ仮に衣をも更ず就枕りて横の裾折り領掻巻し斧柄に良人の枕方に惆然と
考て存りけるを朱之介は頭を撫てそろ空鞴に冷笑ひて寝らざる俺身に恙
るるをも看病さるとおもはれて斧柄は潸然と落る涙を抑拭ひて身に恙
なしはさぞ素よりの工ぶら奴家は屬日一日も昏の業らぬ事し病の根は誰が所
為ぞ皆目見ん事も恥ず折るまるべ諫んと思ひのこし強顔さるつく巖もるを丹

波濤ふ漂ふ心地して。げふまで過しぬるぬる。武藏の畫処よりの主君の使よ立て甲斐もなく。知々来さの帰菴の上ハ忘れ。どく虚々と貪うる友と交りて。酒ふ乱るる本性の浮氣ふ。増花狹他の愛樹を折らんとて。賭ふ耽りて欺詐うされく。盡る盤纏を惜氣なく。使ふ果さぬ悪事千里と俗ふもふ。諺甘ふ漏る露を伊れば人ふ表れくあらへも。噂告えて氣を病ふる。奴家のうふ母れさふ驚れぬるあんまれ不行迹と左してやよけん右せんと母子額を合へる。うち相譚へど術もなく。浅沼女子の智慧の海浮寝の鳥まあねども。丈夫の多よそひう泣く冬の夜寒く年ハ暮れても。晦ふ来ぬの主ふれどぬ。ふれば濟ぬの仇ふ。衢ふ暇を取らせぬの。あんまの従者乃介とやらん坊ニとやうんぐつれ立て。けふ遣りーとく黄氏比よ。へ尋ぬ求めけるを母さぬのうろ泣てそぬ侯苗の措後ふ。倘ふの。ふふ風雲を従者達ふ告れぬ。武藏へかくのふて後のあんまのうふあらぬやと。報ふ駭く朱之介ふ。横撥遣ふ刃を起して。氣色ふ有る當惑の初て夢の覚るどく頭を傾け

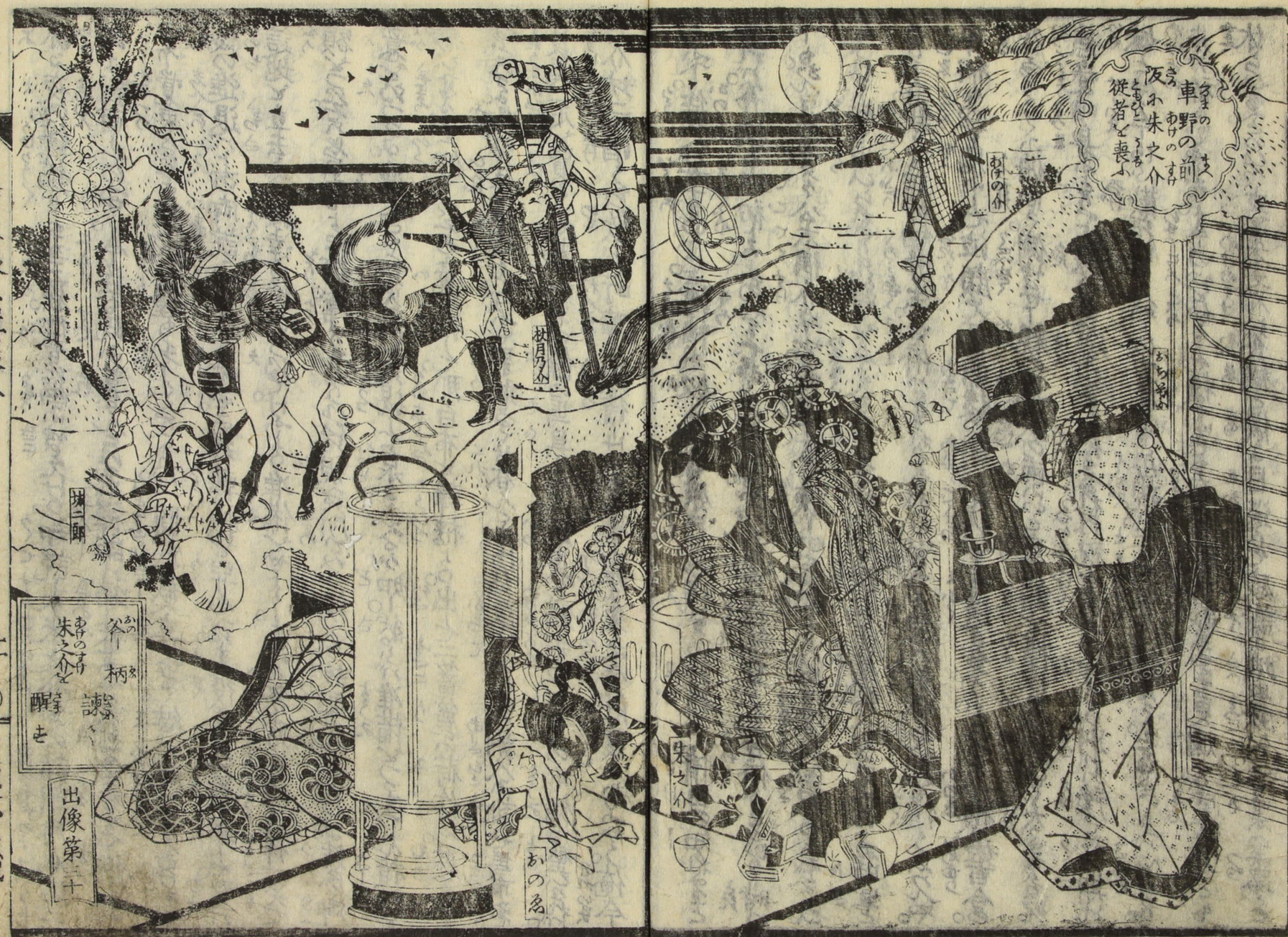
ふを又ぬく。尋思ふ工平。响ふ嘆息ーく妻ふ對ひて。喃斧柄面目もふぬぬ越度今ばうのとくとも。ーー如々来禅師ハけまぬ。帰菴の宿えあらざれ。ーー対面心のく。然ふを主従二人ふ。寛ふあるの伝母ふ養れてハをりぬ。一ぬ武藏へ立ハのとを君侯ふ告えあげぬてどこの地ふ来るとも。そぬ侯那地ふ留るとも。時宜ふよるべ侯工ふぬ。と恥ーくも查知のどく。盤纏を用竭せーぬ進退ふくふ谷りぬ作麼ふふ去くふうんや。と潜ぬ侯く問ふ折ふ。竊聞ふけん屏風の陰ふ。忽地落涯ふ声をふけく。朱刀祢その議ハせんくあうんさのふる。ふ屏ーのふ。とふのれて吐嗟と復駭く。朱之介ハ遽く。横さ蒲團を反退けて。嬢ハのまぬ臥ーのふ。ぬ屏風を片ふ。落葉ハ徐ふ進ふ入。朱之介ふうち對ひて。喃朱刀祢ふ答たるても。ふ言られ奴評判高ふ。あんまの不行迹諫く武藏へ還さんと。ふぬぬーふ。あれども。その衆を後悔ふ。ふのく。ぬぬへ。ふぬあるーどふ。俠沼ふ本意ふ。あんまの息状帰國ふ。ふを設ーふを。ふく今

ゆくうちも置をも及ざるなる助言して。さりかへさんと圓居に入る我等は。いで鳥滸がましくて。釈迦に説法孔子に語道の譬にも似たれども。さらの童蒙も常口に讀む実語教にあらけん欲童子教にもありけん。欲水は方圓の器に従ひ人は善悪の友による。と。本夫は何もなきを。吾儕にも解しやくうる。思ひ合するエまするおん身が這回の愆もうちた人をそのうたるこれその友によるものなるらん。と心つきて改めなば。濁れる水も澄ざらんや。かの人さるの人となるとてもなほ吾儕も知るよしなけれど。雁鳥捉山より其の後まで親切なるものせられる人柄とも辯着に侍れば。かくならべしと思ひもうけず。内祝言の媒妁に憑そせしを今は悔しく侍れ。然とても人さるを恨むは愚な。知の身勝手なれば。そのそれまでと捨措く。お身の帰国が肝要に信心落ちあん身にあるれば。如今来るなを俟ぬとも拝顔えされるなるべし。下さび武蔵へ立かへりての行状を改めて心を擲ち潔齋して出立して又来ぬならなくかく君命を違まするよも侍らじと吾儕は思ひ侍るかし。とく帰国に決して。路費は吾儕がともかくもせん。斧柄に出させたまへかし。

うくて労して功もなく竟に別れになりけるよ。とひとり嗟嘆をなしける日ごろに似げなき姑の乖る訣断に朱之介は頭を席薦に推著て背に流るる冬の汗慚愧後悔限りなく又いふよしもあらざりしが。稍ありて頭を擡て額に著たる塵埃落し貌を改め落葉に對ひて世に有がたき好情。そもそも路費をさへ賜ればくれ日ならず帰国に赴くべし。さはれ一箇の難義あり。二百疋の白布と沙金を斂たる韓櫃を舁もべき夫役なし。いかがせんと問へば落葉は頷きて。それも思按のなきにあらず。年毎の十二月廿二日より五日の間この里の盡頭に馬市の建ことの侍るべし。今日は廿二日に侍れば那馬市の初日なるべし。人に誂へて良馬二疋を買とらせん。かくてその一疋には二百疋の布を駝せ又一疋をば副馬として沙金と行李を駝しなば人は主從迭代りに乗るとせば道中の雜費を省く。これは優たる便利はあらず。いかでとと説に従ひあるべしと世に憑しく説示も心利る姑の指揮は危窮を濟る良薬無明の酔も醒ぬべき朱之介は感服して更に亦異議もなく數回嘆賞しつつ。

適愛されしあん計ひ仰うけざりし人の羽立その馬のりぞ来る明後日は必ず這地を去て武蔵へ還り
ゆかん隊でも稟演するごとく。夫は四五年も勤仕して用ひらるゝことあらば四五千貫の領地なりつ
べし。その折はおん迎をまゐらすべし。ゆへには斧柄と共に東へ来まして孝粮を受給へ。尚不幸にて
用ひられずば仕を致し退隠して。その家を受継ぐべし。それもかくても今よりして零妾時の程で
ゆへばみづから愛して悪まく吉凶左右を侯せ給へ。これ晩生が願ひぞとぞ落葉ちち宜く。それ
あるるで候へども流るゝ水と人の久後は量り知られぬものなるに廿に足らぬ後生のおいるとことを
一下ちがひに憑んとあるに及ぶて。斧柄を妻せるやあらだ。此山根に斧柄が捉れぬと見え。
おん身の次貝織りせば他豈生て還らんや。かくれば斧柄が命根をとり留めしはおん身の恩なり。
是その恩義に報んためは後覚束なき妹侍と知りて縁して越に結せしかくればおん身は河
踰へ帰城の後は年歴ても心に任せるよしなくて夫婦の再會かくもあれ斧柄は那時
鷹鳥捉山にて死たと思ひ諦めるぞ生涯ひとりにても恩義のためにに立る操を天道憐を

ならべし傍ば女子ありて薄情に似たれども原己をそのざるの所為にて情由の知れたるとき
なれば斧柄も亦初よりその心でおはしまさんと思へば奇しき因縁なる音信をかよはしなりし時の
しるおん身の父々公木偶介ぬしと我遍とあく諌しかど都ならぬの優花を妬むあるぞと思ひ
とぶれて些も用ひられざりし紋なるを今又その見るなり。おん身を諌めて武蔵野へかへさるゝは時宜と
なりしも親子二代の勋労生吾伴へまれかくもあれ小身が為には弟なるおん身を惜しむらんや。
斧柄も心を鬼にして泣顔をせず明後の朝は起行を看送り参らしよりま斧柄は姫百合。
花なるなくに俯向側むきせし親の恩涙の雨にそと重頭を擡げ目を拭ひく大方ならぬ思ひ
慈愛咱身にとりても限りなき幸よそれ内祝言のその宵より別れの縁で覚期は
妹と侍今は歎き侍らん者とも思はずと母親は左見右見て領くぞなる心のうちへ心安かり。
朱刀のぬ称かれが本の心をいと後の後までも忘れぬなる長談更て燭零妾時之とも
休らひなさとのひて立と朱之介は斧柄と倶に目送りて感謝に堪ぬ彼の言に無末の露を



出像第二十

氷る夜の鐘鎬々と丑三刻。響き幽かに聞えけり。却説朱之介いその詰朝乃介坊二郎と對面して云ふ。今茲も既に暮んとする禅師の帰菴まで然るを春まで俟とも。

るべし。覚束なしとて盤纏もえ〻くまくれば一圓武蔵へ立つ。縛の趣を聞えあげ。その後の進退は上の御諚に依まく欲せざれ韓椏と早き〻丈役なければ馬に駄して翌は這地を立去るべし。汝達も徒あらざるべけふより准備をせよとの仰ぶ乃介坊三介一笑して額をつゝ出もよに折も帰りまゐらに視て所いみる鏡に故郷恋しく思ひ出る御意とぞつゝ。凍えるとに火に近づき渇しに泉に向るが如し。然らば准備をつゝまつらん指揮を願ひ奉ると心をつくその意に任せ那白布と韓椏とに出し三笠麓に荷作り恋の包を背にする冬の日景の短くけふも果敢く暮んとせれば落葉の朝人に誂て馬市を良馬二疋を買とせ。荷鞍その餘の馬具までも送もく購求めそこの准備も整ひれば乃介坊二は酒うち飲して叮嚀に歎待けり。有徒一程に朱之介は肚裏にあらふ。俺今

猛に帰國の事。笹前五郎に告ぎとる。奥なに知らせざるべく。然れどく人伝に奥なに憚りあり。笹前五郎はこれ消息は奥なも必ずあるべきそ躰て密々に件の書写し事の紛れ坊二とて笹前五郎許遣はけり。勿論四翰を請に及ばず。惜に遣与して来よと。蜜鎬に示して病坊に宿所を指く遣はければ坊二は此の宿所を覚て甚の人とはなるも何なる所要とかはるも知らで病坊へ出で件の仔細を遮与して遣

考かへる。扨朱之介は徒なと報を落葉谷柄に女婢も乃介も知らざりけり。却説落葉は貯蔵の金三十両をとり出して朱之介に路費にと。鎬に谷柄に遮与せ。朱之介は受とりて只管恩義を感じ已ぎなる程に日の昔春にて落葉は谷柄と共侶に朱之介が帰國の首途を祝して盃を薦めしも朱之介は慎まで辞して亦〻喫ぎ谷柄は母に勧されて泣ドとまで禁め難し。涙の多瀬るけれバや燭墓の光の屈ざに小暗き処に佇りて登時落葉は朱之介。道中の用心を問試る語次に。

なん有這地へ来ませし折過りあひし欲あらせ侍れど。這首より一里半許去向の方に車
野と喚做も曠野あり。その車野の中央に岡ありて樹木茂げく。その岡を陟ゆくに這
方の坂を前坂と唱へ。那方の坂を向坂と唱ふ。それをあらゆる里人ハ車の前坂とよぶぞかし。
那裡ハ昼も人跡稀にて。引剥に追れし人もありしを折々聞ゆる事も侍り。且聞に那車野の
前坂を過りなバ必ず由断あるまじとの事を朱之介ハうち聞て。現那車野の前後の阪ハ晩生も
過りしときあり。岡ハ曠野の帯に似て。松柏の繁く立ならぶ藪沢さへあれバ山賊の患あるべき処
なりあくろぬてハと答る程に寝よとの鐘の常より冴て音をも落葉と敷て翌ハ出立の
早かるべきなどとて就枕りぬ。とて盃を納めてひとり納戸へ退きぬ。この日朱之介が帰国のうきを
里人にあらせるが深かりきとらぬの多くて頻りに晩り。暁うけて首途をと落葉が豫てのしらが。
斧柄ハ睡りも朱之介ハ絶に就枕て呼覚され。女婢們ハ炊ぎを急がれて三更夜深きに起
出つ時を錯へず京に炎をとして主従三人に饌を羞めて。昼餉の割籠秣草まで喜ばしく飲て

出しけり。又朱之介主従ハ且白布を馬に駝せ。沙金ハ分ちて三苞にしつ。その一苞ハ副馬の鞍の
左右に結と結著け。一箇ハ乃介に駝し。余は副馬ゐも鞍下の荷のうちによりて。かくて晩
方になりければ主従齊しく一姿を寧せ。行装を整へて別を告て出て行くとぞ乃介坊六馬を牽
ぬ。朱之介ハ蕉火を振照して先に立けり。これを目送る斧柄ハゆゑ落葉も門に立盡し
たる。女婢們も共に名残を惜める隨涙ハ女子の常なり。さりながら朱之介が大胆なりも功なくて
遷りゆく旅路ハ歩も進み難て。しかしへど馬を追ふ栄枯得失身ひとつにかかる恨みのみなる鏡
曇りて鉄し冬の月影さへ寒き暁方の天を瞻仰て別れぬ。却説朱之介主従ハ馬を追ひ
里を離れて遠くて車野の前阪まで来まなると見れば東方やうやく白みて月光薄くなりしかば乃介
坊二ハ馬を追ふて阪を登らんとする程に馬ハ二足ゆかず鞋を損らしてその緒をはなく引かける
乃介坊二ハこれを見てうらうら右のほすれバいまだ三里ゆかぬ足ぬ路にてあくちとも鞋を損らし
いかでもそれ後馬を牽駐めて荷鞍に附る易鞋をとりおろし締をときて居て躬て前

鞋を結び直へつ、共侶ふ立あがらんとする程ふ誰とも知らぬ樹間より弦音高く響く箭ふ悩む
べし杖月乃介ハ乳の下より脇坪まで射られく苦と叫びも果ぬ身を轉ぶと仆れけり是ぬと
駭く坊二郎も倶ふ吐嗟と叫びて逃んとする程ものあらばこそ飛来る二の箭の響音ふ
と共ふ坊二ハ七九の命のあらんを笠比深く射串れてあるで枕ふ臥こうけり。そぶ中ふ朱之介ハ馬ふ
後れ一二町可り稍近つと従者们が射られく即死の形迹を見るとへども何処より射出
せし箭ぬとも認ぬ仇のヨメふも量らんとあるに寄るとこぶ沢二疋の馬の間へ矢を衝と入りて馬と
馬とを盾ふ仇ひで求るべ駭ぬんと思へば騒ぬを刀の柄を握り合る身を構て四下を眺でゐ
なりけ。什麼朱之介ハ今ぬ箭面を脱るや脱れぬやそれぬの下ふ解分ると聴ねか

第二十四回

直行悪方加減を恣ふ
晴賢竊嘗て中毒ふ駭く

登時前阪の樹間より顕れ出る一個の癖者合る弦弓投捨てゆ招ぬ声をうけて
末ぬ驚ぬ怪ぬるふ咱真夜中より和君を俟て久しく在りしぬ。とうとう徐ふ阪を
下りて覆面頭巾を脱けるとこそれぬ是別人ぬ安保箭五郎直行ぬ今ぬの緯の為
体ふ朱之介ハいとゝまく疑惑ふて由断ぬ肚裏ふ思ふ。原来彼奴ハ俺奥ぬと情
由ありけるを探知て妻敵を駭ぬんとぬ且後者们を射仆すぬ刃の翼を共除ぬ本
意を遂んと計較けん遽莫彼奴一人を俺ぬ怕れんや。為近つ為ぬ近つ為ぬ撃れ
乃介坊二ぬ與ふ然ぬ復ぬ已べぬや。と尋思て声ぬ立て俺後者を遠箭ぬ被
ハ山賊の所為ぬけんと思へども以ぬ蓬紀與率動ぬ箭五郎和主であり一ぬ恨ぬあり
宿意ぬ述て雌雄を決すべ武士ぬ恥ぬ切所ふ埋伏て蜚毒を以て後者们ぬ
射て殺せハ卑怯ぬ卑怯ぬ。ふうあるべハ俺ふあらぬ言ぬ。と歌開
猛く罵ぬ。笠間五郎呵々とうち笑ひて差ぬ和君の推量咱豈知ぬ。ふ後者
们を殺さんや。射て殪せハ和君ぬ忠信ぬ。ふ未然の禍を攘ふ和君を救ん為ぬ。

文政堂蔵

和君が鷹捉山の那山猿を射殺しと杣木の妙を拯ひと夏同日の情義なるを恁ても
暁得のぞ才子の似げなきとふてそとのれるも義なるべし朱之介沈吟く然ぐ
宵て和殿の胸中敵欲貪方欲猜ひくろ俺が丘母の貧なるく帰国よ赴くを効く
後者乃介坊三郎を殺せんとて俺與る禍を禳ふとらるそ疑ふべく信ぜべからざる比ぐ
山猿を殺しと斧柄を救ひる情義とふべ
君の為に迷ふくその身の必死を知らざるのを然ぐ見ら説示さん心を鎮めて聴の量義の和
君君命を禀で這地へ来つるに何の為を如き木禅師が佛像を作らせん為まぐやこの
也恐る秋よりしと年極るまで逗留の雑費る主君の銭財をのくをとるく使捨て竟に禅
師の面ぞもんぞ齎しける布施物をそ尽武蔵へ帰り還るるせ不ひと比君侯へとも
くの出るくんや況後者の暇をとせく京浪速と遊歴せしめその身の舊縁ある任
して里の婦人の女婿ふるしと素妾時人のまぐとも奴隷の言の祥るとも問ぜくふ

ふとあくぶ意するのよしと主君ふ怪えく罪せられんの疑ひる。縱ぐ
君をとも一旦罪を得るふ及ぐ君石の寵愛も憑むべくぶ。微子瑕も終ふ首を刎られ鄧通の
餓て死ぬ在下この義を思ふをとそ和君と死地ふ入らせどそ後者二名を射る殪しと未然の
禍を禳ひ友るのく信ぜしと那山猿を射る杣木の妙を拯ひ情義を優りたせ
労らんや感ひを乖しあくと舞せくく説諭せ生之介の忙然と酔るぐ如く醒るぐ如く
太息と吻ひく感ぜると大々言ぐ人のやまるとろへる。找を近つたるも對ひく怪る優る
御遏の才幹ひくく趣その圖ふ當ぞ先見実ふ差ぶべくぶふ生河踰ふ啓行ある比主
君ふ禀せしもあり主君も必這使をよくをぐたのをそ世ふ憑しくぶられしと許ヨの盤纏戎
費しるぐく寸功もるく帰りまあくぶその罪脱れぐこのべ。よや君侯ふ憐まく重く罪るく
のぐとも老臣們ふ諾ぐべくぶ加以この年来寵を媚を朋輩が折るくと誤言と
不測の罪ふ陷さんと思ふのヨくくん其処ふ心のつぎと乃者盤纏ふ

思ふ折ふし。五位母ハ諫められてその資さへなくしてハ只管ハ帰国と急ぎくるの暁ハ立出しハ。かへさぐも浅慮の至り。御邊の好意微りせば腑を噬むともいふかと後悔其処ハ立べきを感謝ハ堪ぬ幸ふれども後者二名を喪ひ。縁由と報ずと。杜木の宿ハ還りやうと何処ハ在りと如々来禅師の帰菴を候て素懐を遂ぐべきの義も指揮を願ふのもとのふと笛五郎ハ申べきと今ハ〻ハ女々しげる迂遠なり。簡ハ禅師ハ菴へ帰るとも如ハ要る人を用る戦国の時ハ生れて志あり。才あるのみならハそや漁ぐる禄ハ敷れて既ハ武運の傾きたるを扇谷ハ恋慕ひ徒ても果敢ぬ功を立て。武蔵へかへらんと思ふハ老實過て時務ハ疎ふ。和君今幸ひハ五百両の沙金あり。且五位母の贈りる金もそゝ仮あるゝんハ只それのみあるを。三百疋の白布とその馬二疋と售るとハ又二三十両の金を沽べ。そを浪人の貯禄と大諸侯ハ仕へ三稔と云ハ俟べし。和君の業迹ハ杜木の母子ハ知ぬく隠しと在下宜金を藏下。縞ハあるよりハ引くへと病坊ハ今ハ躊躇ふとと毒氣と吹入む悪友ハそのこゝを朱之介ハ信悦て異説もなく御邊の教諭ハ高論なりと貴宅をあゞとて禄を求めて良主ハ仕へんとされ乃介と坊二ハ戸骸をそハ乗措ハ人ハ表れて禍殃らん什麽何処へ隠れと問へハ笛五郎後方を見ハ。彼竹藪へ引りとあるく。葉措くとハ人ハ表るまゝ。ハ狼狽られハ昏とハ鶏つけて一日ハ啖ひ竭さん在下ハ又この馬二疋を近郷へ奉ひて布ハも共ハ售滅ハ。価を沽べ。有徒ハ和君ハ重くとも沙金の苞を三箇ハ背駝ハ乗て間道ハ蔽屋へ赴くハ人ハ表れ乃介と朱之介ハこの説ハ任と馬ハ附て沙金の苞ハ乃介ハ駄せハも取ハ笛五郎ハ任ハ笠をふかく路を選て病坊と引ハて背駝ハ有徒而朱之介ハ蹟を箭乃介と投て赴く程ハ杪を離る朝鳥の声彼此ハ呼えけり。當下笛五郎ハ任ハ笠乃介と坊二郎ハ腰刀を奪ひと。衣物も血ハ染ハ龍袋ハ咸剥く畳ハ敷ハ馬ハ附て二箇の戸骸と竹藪の奥ハ引退けて又ハ揚る弦ハ弓の弦を外ハ鞭ハ二疋の馬と

追ひぐらさんそ前阪を横ぎりて。鷹捉の方へ急ぎけり。原るよ。這安保箭五郎直彩い大内左京權太夫義興の家臣と宣へ。安保弦内直根が獨子。初周防ゐあり。日々遊倅ありけるが。放蕩を頼の癖者ゆえ。良くゐ支を甘ずることゐく。剩鶴峯ゐ程遠く及。新室積ゆえ奥ゆと喚ぶ。做せ遊女ゐ初しよろ。淫樂ゐのミ身を擲ちて錢財を喪ふこのくだくとゐ限りもなければ。親の貯禄いへぢ〳〵朋輩わも筋ゐ紀借財の債を貴つぎ果ゐ弦内が預りの兵庫中なる武器馬具を。窃出ゐ典却しその金ゐのそ件の奥ゆを贖ひたりけるゐ幾程もなくそのゆ皆えそ罪せるべきのゆりしと。有數ゐ親の心あらてその子を罪過ゐ殺せる忍び難き債いをで身ゐ引うけ箭五郎ゐ盤纏を取らせて大和の方へ落遣りけり。これより箭五郎い件の奥ゆと携へ。山口へ亡命し。此の由縁をゐあそよ大和の上市ゐ落着て。躭て奥ゆと妻ゐと六年以来病坊ゆ借屋よりの里人の子共坊賈の小厮ゆンどゐ算筆を誨え口を餬ふ。幽なる世を渡るのえれいそれ心ざゆ取るよりも

ゆえ悪根ゆれども。うちえんるとろ人柄よくて。佞辯利口世才あり。ゐどのそ里人ゐ欺れて見くゐ好人へと思へうゐ。況落葉の箭五郎の人とゆを知ゐれども。增とゆの内祝言ゐ媒介ゐ出べきの。浪ゐ。ゆえ。鷹捉山ゐ朱之介を誘ひ来ゆる好もあれ。意ゐ子の望をゐ任せ。媒介ゐ来ゆ。ゐ。稠蕭墻の内ゐ起りそ後の恨ゐとゆるエヨヌゆ。程ゐ箭五郎ゐ。いゆる比ゐ。ゐも杣木の落葉が朱之介と舊ゐ。ゆと相譚て迭ゐ素生を説示せ。初ゐ竊聞し。朱之介が五百両の沙金を齎し。ゆエゐ盤纏も許ゐあべ。ゐと具ゐ知て窃ゐ。推て爺柄と婚姻の媒介ゐ。ゆそ好を結び。朱之介ゐ殊更ゐ。ゐと親しくゐそゆ。遂ゐ病坊ゆ宿所ゐ。ゐれ酒を薦め賭ゐ耽らせ。その盤纏を奪ふ及びて涙ゐ後悔ゐ。せ。ゐ。欲知り〳〵奥ゆゐ密通させ。れを釣らんと欲ゐ。ゐ。且香餌を投るとゐ漁父のゆ段ゐ似ゐ。と朱之介が俗才あり。と且奸智ゐ長なるも年少れ。れば。れを悟らゐ。ゐゆ夜落葉ゐ誘られて武蔵へ還らんとゐゆ及びて。ゐ奥ゆを悲憐し。涙ゐ別を告ゐ箭五郎ゐ消息し帰國せ。と

知らせしかば笠前五郎は喜び飽まで這回朱之介が河踰へのそめる。沙金白布をも物せんと思へどもその夜先づ車野の前阪を退かんとて伏躯れて両個の従者を射て殺し朱之介が利害を述べ。その隨に説惑して帰国を禁めて病坊なる宿所に舎藏んを遣せしに孫て計較あれば帰るに至て朱之介は進退去べく小児のごく然べく尋思及ばずして絆みそのを意に任せしも。これも亦故なきにあらず帰国は朱之介が情願なれど落葉が意見に従ふて猛く這地に立去るのみ。竟に功なきをもて逆運とかこつて懶く安危を定めがたくして今笠前五郎に説惑ひられて乱離の人となるを思ふに涙ぐ宿所に舎藏んとのられしかば飽まで奥まで密会ふ。ようやくにして笠前五郎の仮価を暁得らるを欲薄情なるの動きれば揣られて悩る圏套に陥るを和漢今昔に勘へ鑑て誠むべき間話休題然程に朱之介は窃に笠前五郎許赴き奥まあて帰国の念を断てかへり来るるに且笠前五郎に呼られる絆の趣意を有る仮に耳を示して沙金を預けしに奥まを笑ひ受取さに教へたるに光明を送りのみとも貯禄遺れ多きあるねば何をもの後にまでもこの宿にとせんと慰めて那編室にて茶を看め早飯を羞めるに彼方に仮は又何ぞ舟底形の木枕の折々軸る音のみ七日の間まで相譚ひ有徒に程なく笠前五郎は車野の前坂に朱之介を別るるに臨みて那馬三疋を何処へ牽のそ来たれ二百反の布帛に馬を行李まみる活却して美酒一罇と散も種々買ひ取て人まのてくかの者ねて来一人宅に返して奥まに酒を湯めさせその餘のものを従者と辭せしく分付て那編室に赴く朱之介は對面に布を馬も皆售に豫て直賠とをるに違はず二十餘金を懐ゑ沙金を朱之介に受取とれを労ひその金を十両許分わく且當分の食料にとて贈りて笠前五郎に左右に取ぐ過ぎを推辭んもう辱くよりて収めり夏より側の酒燕にて献つ酬れつ相勧れども外を憚らんあれば仮に未ゆる声とそそぐ況奥まに三弦を弾きとぐるるけの折々歳暮

朱之介、その次の日、あるじ夫婦の被衣をぬぎとり、又五両の金を出して、これを奥へ贈りぬ。奥へ入りて欲りし。流行衣裳を新しく刺立て、春を迎ふ。正月に貴賤に送る。大加ひ寿ぎ。あるじ、ひとり、ひとり、人ごとに、誂へ、楊弓一具、三四張、何の程か買ひ、これを朱之介にもてなす。彼、のこれさぶらひ、背に空地のいと大的をば射ぬ。保親、宜しめべけれども、外出のつ人あり。れて、杜木の母子、なかせんとれも、亦影護る。這楊弓、家の内、弄ぶ便られ、形ばかり准備をこそ。在下、敵あるとも、只二人で奥尾薄く、あらん程遠くもあり。故に菩寺の郷士の子、二尾復四郎弘澄と、喫る少年あり。和君、二才なりの弟、聊在下と、舊縁あり。然れども算術の弟子、これ生平、親しく来る。校件の復四郎、祖父、大内政弘、の被官なりけり。二尾加賀守弘直、これ、往る文明の初年、弘直、主を怨むとて、猛く謀反の企てあり。政弘、主の伯父なり。大内、道頓堀主君を

仰ぎ、山口の城を攻んと、議する程なり。弘真、誅せられ、その子、二尾加賀四郎弘景、大敗して、一命を助けられ、遂に追放せられ、これより、その後、加賀四郎、本州に曽寺の郷、落着て、地方の郷士なりけるが、父弘直の貯蔵する軍要金、許多ありけるを、その身他郷に、さすらひて、今に至て、貧しく、田園を、ひそかに購求め、且里人に金を貸して、貧窮賢人のなりけり。那加賀四郎、在下が、母方の族なりて、父子、倶に疎ければ、因てその子復四郎を、在下に、従しく、算術を学ばしむ。復四郎、那復四郎、なるとあり、影護たるを、親、豪家で、いへば、為に、なるとも、勧めて、倶に、楊弓の敵、なるべきに、奥へ、と、真実、ぞ、説示、折々、窓の障子に、鳥影、ちらして、那復四郎、来れば、前五郎、なりて、ちらち、鳴らし、七奇、動かすと、稱へ、躰へ、編室へ、招じ、せず、朱之介を、引、せず、二尾、刀、の、あり、方、ざる、京家、の、某甲、と、嫡子、なり、継母、の、詭、よりて、家を、追れ、の、地、の、閑居、なり、とて、某を、頼、ゆ、の、方、ざる、の、大人、に、某、舊交、なる、その、意、に、任、と、昭、なる

らせ給ふ。さばれ閑居の徒然を慰めまうすべき術なきに。那庭訓往来にも正月なる雀小弓は
舊事あるを宜として。揚弓をもてながき日を消させまゐらせんと欲するに介るべき社友なし。さるを
殿の咱舊族にさへよろづに偏あるとあなれば。その敵手を究竟せんより遊戯の暇計に入
ますくなれど與には這客人を慰めのみで幸ひならん。勿論世を潜ぶ人なるをもて外へ洩しなと実
あるを説示しを復四郎はうち聞きて一議に及ばず唯諾をしつ。朱之介と名対面して寒暖を
演。安否を諮ね迭る四面八表をとらち譚ふ程に。笘前五郎は縁頬に的を建花莚を布渡して
準備大かたも整ひければ主客三名並坐して揚弓を射く優劣を相試く興あれば興まして
箭を拾ひ茶を肴め果は又酒を薦めく復四郎をも款待しければ復四郎は遊戯を錯ぶ
少年輩の癖なれば是より後も親よ隠して算術の稽古に假托け日毎に来つく朱之介
らと倶に揚弓を射けり有繇而五六日を歴る程に有一日笘前五郎は朱之介復四郎等
と相譚ふやう恁日々に遊びてせば楽しからぬにあらねども各々なす事なくして勝ても負ても

便是小人両面為

その甲斐なければ竟に飽て興尽ぬべし。年毎の正月のみならで禁裏にも賭
弓を叡覧ありて。勝たる者には鏡を賜ふて賞せらるると聞えたり。有繇ばけふより咱
們も賭弓にして興を添てんはいかに。その議りはよりそのよせば朱之介も復四郎も云にや及べ
と応して迭に数を定め輪物を出して終日輪ドと射るほどに朱之介と復四郎は左に
右に正鵠稀にて黄物を失ふのみなれば。素より這両少年はいづれも武芸に疎かりしに
就中朱之介は射る技の人に捷れて百發百中の修煉ありしを揚弓は又格別也。這
田舎では見ざれば罕にも贏ことなかりしが且羞且恨みて輪物を推ぬれど已に一日の
展日の不覚を取り復さんと欲すれども復四郎より優れるのは笘前五郎の機攫なく
落葉が取せし二千両も白布と馬の價の便残ありしを抓出して絶る程に喪ひければ
ト魂の全からず已にして又那沙金を見して使んと欲すれば笘前五郎が持ちし沙金百両を
圓金五十両に當られども這地方には通用せぬ京の三條にて換へして持ゆけば時價宜しと

佐野五ら
おくま
出像第卅一

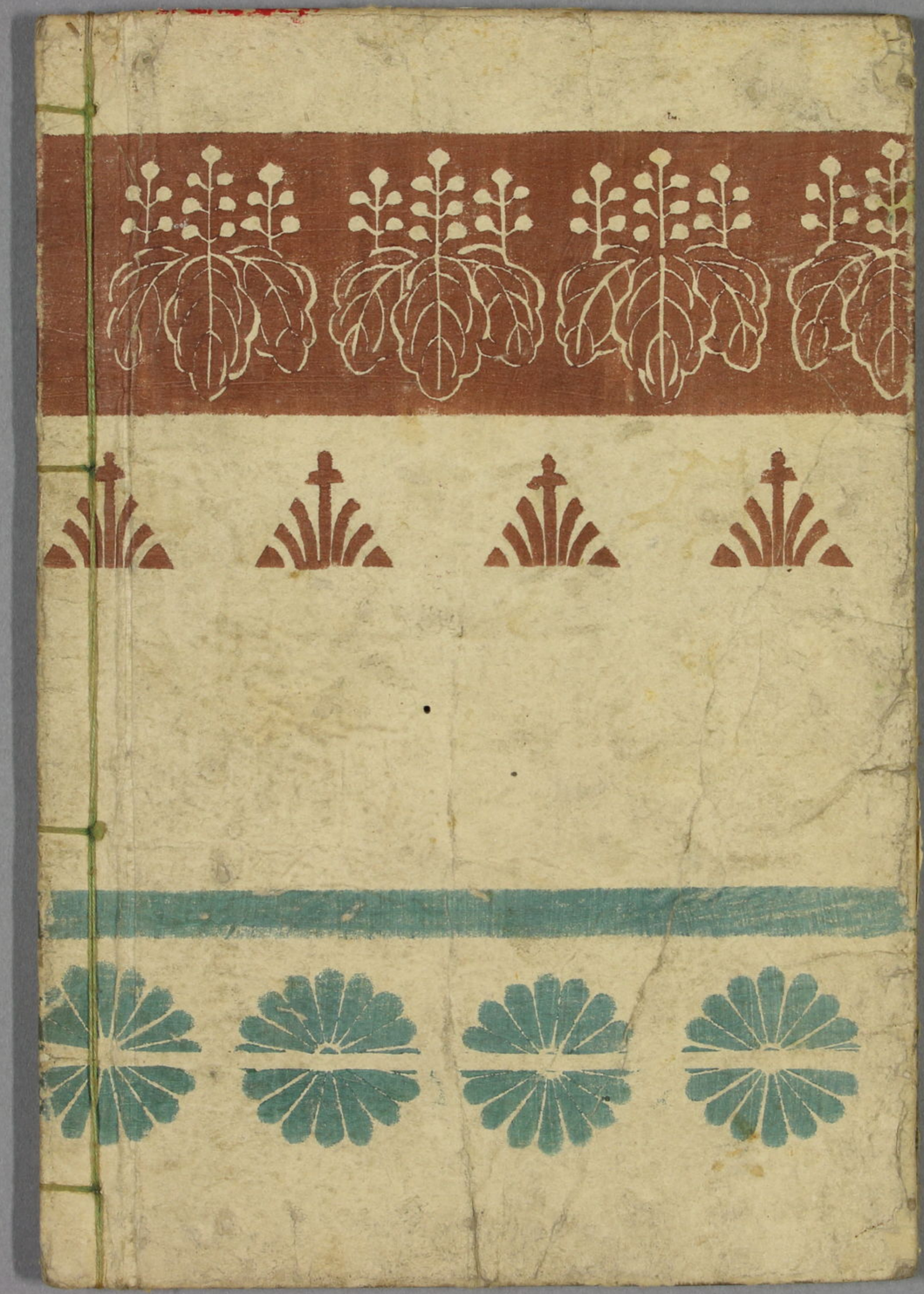
朱之介
宜徒家礫
拾八番
尾賀ら

なるのみ路遠けれぞそれも詮なし。されば兄貸ともこれ數ならぬ咱のそれを兄き家まで。
もん多の随意なりんと。とふと朱之介い彼あまぞ兄價い俺決して厭ぎとく兄ーとあのと。
憑く奥まで頂け指紀る。沙金一苞をとり出させてそぶ侭遁与を笠前五郎い苞を解く
包の數を檢めて受とりつ何処へ行くと兄ん俵を二晌あまりふ七。圓金ふ換てめと来まれい。
朱之介い欲びく心つうと出ぬ。ぬく日々ふ楊弓を射れども生憎は正鵠ふ稀
なりけりいあるを件の楊弓い笠前五郎が豫く仮倆ゆ。霜ふ細工人を誂へ朱之介と復
四郎を授けー弓ゆ機関ゆく弯固めゆ裝とゆ。狂ぎとのふとるく笠前も亦頭を鉛を
篭く。落るまを年老ーを這少年们い楊弓の精鹿ものまぞ認くぎりけれぞその奸計
とく。朱之介い沙金を三三百両喪ぬ復四郎も親の財を三包金ゆまりのち牛七果
敢るく笠前五郎の有ふ七けりそを笠前五郎い日々ふ奢る工夫くるふ三ぬ膳ゆ珍
味を盡七一々も酒嚴ぜるとるく奥るゆい髪の飾ふ玳瑁をり七頭を貫せ衣裳ゆ

和漢を論ぜ。價貴ぬをの彼せく朝より粧を琢せ猛ふ女婢二名ぞりを艱者てその一
人ゆ薪水の支を掌らせ。又一人ゆ楊弓の笠前をとくせ。不盃盤調度ふ至るまで。必ずの
随ふ買ちく。忌憚るとるーぬ間近ぬ里人们いこれをこ仕くく。敬ぬ怪ぞとふゆ。左
右なる程ふ復四郎が親るりけ。二尾加賀四郎弘景い。これらのようを偽くく駿ぬ怒ると大
くるーぞ堅ーくその子を穿鑿せーぬ復四郎い憑むまりく乃若安保の宿所を楊
弓を射ーるーぬ。財貨を喪ぬ。その故い箇様ーと有るまふ報うければ加賀
四郎いよく怒りく。那笠前五郎奴が放蕩る周防を亡命ぞくる比遊女をさへ携くく咱を
憑く来まけれぬ咱舊縁をふるそ。且く宿所ふ留措ぬ。鄰郷ゆ家を求めく。程從さ
せく六七年人るまを世を渡るい抑これ誰が庇ぞや。有恁る恩義をこ忘くも忘まく年
るを少ぬ復四郎を。そのうと悪支ゆ引入れ許ゆの財貨を喪ぬせーいい是騙兒の
段ふ笑ーぬ言語同断の光棍その義るーぬせん術あり。必ずあらせんぞと罵りく敢閑ぬて。

復四郎がそぞろ侘しく歎しく一室に拘篭て絆の準備を急ぎけり。然程に朱之介ハ復四郎が来ざりしより敵も足らざれば興さへ竭て又楊弓を射んと欲せざりしも遊戯に耽りて貯蔵をみな失ひつ。沙金も絶なりてしを今さらに後悔し欝々として在りけるを。奥なる竊に慰めて只管先ほかりけるが音待しけり。既にして笥五郎ハ聞るべきものとより果つ。今さらよしか此るるべしと思ふ心を色にもみせず有一日朱之介に對ひていふやう。在下ハ要事ありて明日平城へ赴く也。一両日ハ逗留すべきに留守を憑ミ奉るなれバ徒然ならんが是ぐも閲して慰めたまへとひと正首によりて告く。きのふ上市なる骨董店にて買とりたる太秦の草紙の画巻物と源氏物語の缺冩本の絶に五六冊ありけるを。そぞろ取出て貸にけれバ朱之介ハ受歎びてそハ何事乃知らねども疾見て手く還らせ参らせん今ハ日蔭の俺身にあるれバ留守にも役に立ずさりとて賊難の防禦にハ狗は優てあるやせんと応て呵々とうち笑へバ笥五郎も亦うち笑ひて。奥なるも云云と留守を委ねつ。その詰朝宿所を出て八重桜まだ咲ねども名に肩ふ平城と艱て惣急ぎけり。然程に朱之介ハ去歳の暮春より安保が宿所に躱居れども折の万くて家ある外へハ出ず楊弓を射て共侶に遊びしたりけれバ奥ハとさそうち譚ふ。暇ありくもあらでこよひハ笥五郎ハ平城に所要のあれバとて今朝とく出て去ぬ。あなれバ東西もとさるをゆるさで酒も沽て殽も買て来よとて両個の女婢們に東西をとりもたせて出し遣し軈て奥なるを褊室へ招きて衣被著て自おろかなく譚ふて半晌ばかり夜女までハ侯ひ侍かりけん。そぞろ侶倶に輾宿の夢を見く結ぶ折から何程かへりて来にけんと思ひける笥五郎が縁頬の障子蹴放ちて奸夫淫婦を見たり其処動くなと罵りて走蒐れば朱之介も奥なるも共に吐嗟と驚き胸を潰し怕慌て起んとせしと起しも立ず登しかまろびて膝をもて楚と押えて准備の索を腰より手く引出して朱之介と奥なるを犇々と紲て左右へまちて縁頬なる柱に堅からく繋ぐ程に酒と殽を買て還らし両個の女婢們ハ這為体に駭怕れて逃んとせしを笥五郎急に呼とゞ

めて。若们怕さとるれそゝと迄東西まのと来ろ。とく酒を温めて。咱は喫せよとのそゞろ。躰て
件の酒敬を飽まで飲吸けり。誠や恥を忘るゝの敗れを及てその非を悔るゝ。べく人る
甲斐ゝあれゝ奥方ハ勸解とも免されぐて。兵ゝうし欲ゝのゝ主朱之介を箭五郎をぢぐ
とゝゝゝゝく安保ゝしさを憎とても悪を飽ぐ必まゝゝ色ハ深念の外とぞいふ。俺徳を
今ゝくふゝとくゝの子まども素より交り浅ゝ。ぢゝて。好ゝ願ゝく命を助けゝ。然ゝ他郷へ
赴ゝく。ゝもゝくもるゝまく欲ゝ。願ゝハ素を解ゝくよと。嘲つゝ箭五郎冷笑ゝ。這度出夫奴が何
をゝのゝゝ身舊里を在りしゝ迄。殿の金を擲ゝく。親ゝ勘當せゝるゝも比台そのゝえる故
ゝ所ゝゝゝゝ法倫れゝく阿容々々と免しゝゝを法やゝゝ立野の陣所へ訴ゝく。素ゝ頭ゝ剃さゝ。
覚期ゝせよと敦圓ゝゝ。ゝゝ尼奥方と朱之介を便ゝ乗一人ゝ早ゝゝ立野の陣所へ行て
見ゝ。畢竟朱之介奥方ゝゝ罪の讐断甚麻ゝ。そゝを次の巻ゝ鮮分るゝを聽ゝ。

近世説美少年録第三輯巻之二終

宝山